投稿

奄美与論島における二十三夜待

澤田幸輝（和歌山大学大学院観光学研究科）、尾久土正己（和歌山大学）

1. はじめに

二十三夜待（以下、三夜待）とは、旧暦二十三日に月出を待って拝礼する月待信仰の 1 つで、かつては日本全国で信仰を集める祭礼であったとされる。特に江戸時代には、娯楽的要素と結びつきながら大変な盛り上がりを見せたことが報告されている。一方で、明治以降は急速に衰退し､現在では｢二十三夜塔｣を残すだけの地域が多くなっている[1]。

本稿では、鹿児島県南西諸島（大隅諸島、吐噶喇列島、奄美諸島: 以下、南西諸島）における三夜信仰にまつわる文献を概観した上で、今なお継承される鹿児島県与論島の三夜待の様相を報告する。

2. 三夜待をめぐる議論

本章では、三夜待に関する識者の見解を概括的に整理する。

柳田[2]は、三夜待が庚申信仰と同根の祭礼であったことを指摘する。柳田によると、宮廷の庚申行事と民衆による庚申講の起源には違いがあり、前者は十干十二支などの大陸からの影響を受けたもので、後者は「猿が山から啼いてくる季節」に行う「この邦固有」の信仰であったという。また前者は「個人の安寧幸福のために催されたもの」だが、後者は道の辻で「作の神」を拝む「パブリック」な祭礼という違いがあることを指摘する。そして、三夜待が盛んな地域で庚申講が発達していないことを証左に、市井による庚申講が変化する中で三夜待が生れたと論じている。桜井[3]も同じく「二十三夜の月待講などは、わが国在来の風をより多く遺している」とし、三夜待の独自性を指摘している。

また柳田[4]は、三夜待の「マチ」は「『おそばに居る』こと、即ち神と共に夜を明かすことであつた」が、段々に「待つ」ことの意に転訛してきたことを指摘する。そして、徹宵して参加者と共食する点、時代を経るにつれて祭神が不明確になってきた点等から、庚申講と三夜待の類似性を強調する。旧暦二十三日に「マチゴト」をした理由には、下弦という特徴的な月の形に由来するとしている。

柳田の行論は論理の一貫性に欠ける向きがあるが、その主張の要諦は、三夜待が日本固有の庚申講と同根であった点に収斂される。かかる柳田の主張に影響されてか、例えば大島[5]は「庚申と二十三夜とふたつの信仰は、根本において、ひとつのものであった」と論じており、庚申講よりも三夜待の方が古い信仰形態であることを指摘している

石造碑文から三夜待と庚申の関係を議論した小花波[6]は、三夜待を中心とする月待信仰を基底に庚申講が生れたと論じている。南北朝期に隆盛した三夜待は、日本古来の月神信仰に仏教的要素が絡みついて形成されたものであり、その習俗が「守庚申」と結び付いた結果、庚申講が誕生したという。

他方で窪[7]は、庚申講と三夜待が表面的には酷似するが、文献をもとに仔細に検討すると､その両者が混淆したのは昭和初期であり、両者は別の行事であったことを指摘する。彼は、庚申の起源が 8 世紀後半である一方、三夜待の嚆矢は室町初期あるいは南北朝末期であり、またその目的が徹宵ではなく月出の拝礼にあること、仏教や修験道による影響を強く受けて形成された祭礼であることを指摘する。また三夜待は､｢三十日仏｣で二十三日を縁日とする勢至菩薩との関係があり、個人的な祈願のために行う祭礼であったという。

以上の所論を踏まえた上で、本稿の立場を明示すると、まず三夜待が日本固有の信仰であるという柳田[2]の説は、文化の構築性の観点からして首肯しがたい。小花波[6]や窪[7]が指摘する通り、三夜待は仏教や修験道の影響下で立ち現れた信仰であり、また個人的な祈願を目的とした信仰であったものと思料する。

第二に、三夜待を庚申講との関連の中で議論する既往研究のスタンスからは距離を置きたい。これは窪[7]が指摘する通り、庚申は徹宵が目的であるが、三夜待は月出の拝礼が主目的であること、また本稿の主眼である南西諸島では庚申講がほとんど形成されていないことに依る。

第三に、窪[7]が「三夜待については資料がきわめて不十分」と述懐する通り、既に本土では三夜待の習俗がほとんど現存しておらず、その実態を資料渉猟に頼らざるを得ない部分がある。したがって本稿では、今なお執り行われている三夜待の様相を仔細に記録することを通して、後進の研究に資する情報を提供することを目的とする。

3. 南西諸島における三夜待

大島[5]が指摘する通り、わが国では北関東から東北一円と、九州とその周辺の島嶼地域で、三夜待が特に活発に行われてきた。三夜待を「時代的にも相当に新しい」もの[8]、「（薩摩）藩政となってからのもの」[9]とする論者も管見されるが、本土の多くでかかる信仰が消滅している現状にあって、これを議論する意義は十分にある。本節では、南西諸島における三夜待の特徴を概観する。

まず三夜待を含めた「月待」は、地域によって呼び方が異なる。奄美大島では「ウヅキマチ」[9]、「ティッキョマチ」[10]、「カミサマオガミ」[11]、徳之島では「カンジョリ」[9]、沖永良部島では「トートゥヲゥガミ」[12]や「カミマツリ」[13]等がある。拝礼月は旧暦正月、5 月、9 月が多いが、奄美大島では毎月拝む地域もある（表 1）。一般に正月、5 月、9 月は「神月（ハミジキ／カミヅキ）」[14]あるいは「悪月（イヤシヅキ）」[15]で、神の行事をする月に当たることから、結婚式や普請、引越、旅出等は忌避されていた[16]。

行事内容や礼拝方法も千差万別である。しかし大隅諸島では集団講としての側面が強く、南下するにつれて個人祭礼としての側面が強くなる傾向にある。

屋久島永田では、村落総出で三夜待をするとともに、皆で「二十三夜のカメ踊り」を踊るという。また神主として青年団から選出された独身男性 2 人は、必ず「御岳参り」をしなければならない掟がある[17]。

一方の奄美諸島では、家族の干支によって祭日が異なる特徴がある[18]。徳之島では、ノロやユタが 13 日から 28 日の各日の中から個人の祭礼日を決めたという[19]。ただし二十三夜は「旅待ち月」と呼ばれ、出郷者の安全祈願をする日であったことから、必ず行う地域が多い。またトギ（伽）人を呼びつけ、メサマシと称する御馳走で饗応する代わりに、参列者の眠気覚まし役として歌三味線や妖怪話などをしてもらったという[20]。月待の間は居眠りしてはならないとされる。

祭礼前や月出後の礼拝方法を見ると、例えば屋久島麦生では、祭礼前に寺で餅を搗き、夕日を拝むところから行事が始まる[21]。徳之島東天城では、月待だけでなく日待もすることが報告されている[22]。喜界島の場合、祭礼当日は潮溜まりで沐浴し、神具を全て洗う精進潔斎が行われており[23]、沖永良部島下平川ではまだ踏まれていない浜の砂を事前に運んでおき、月出後に塩を混ぜたその砂を撒きながら「福は内、鬼は外」と唱えて屋敷を浄めるという[14]。

共通点としては、いずれも禁忌を定めている点、月待の間は線香を焚き続ける点、また

表1　南西諸島における二十三夜待（筆頭著者作成）

文献	地域	実施月	目的	供物
[21]	屋久島（麦生）	正月、5月、9月	村の災難払い	・オハナ（月形・足形の小さな餅）を月の数、拝者の年齢だけ供える ・サイ（海草）を12供える
[26]	屋久島（楠川）	正月、9月	出郷者の安全祈願	・月と太陽に模した鏡餅 ・丸餅365個とツノマキ ・モロブタに穀類（米や大豆など）とセイ（フジツボ貝） ・シトギと焼酎を混ぜた御神酒に竹笹をいける
[17]	種子島（油久）	正月、5月、9月	出郷した子の安全祈願	・月の輪と日の輪 ・365個のドウ（小さな団子） ・御神酒（焼酎）
[27]	悪石島	正月、5月、9月	海上安全	・御神酒 ・月の輪の餅2個と小餅5つを皿に盛る
[28]	大島	正月、5月、9月	出郷者の安全祈願	・東向きにある小枝を花瓶にいける ・御神酒 ・シュキ（しとぎ） ・神水 ・ウヤクファームチ（白米を水に浸し、臼で搗いて熱湯に入れて煮た大小の団子）を盆に盛る
[29]	大島（名音）	毎月[1]	家内安全・安楽死	・ウシンメェ（水に浸した粳米） ・榊 ・御神酒（焼酎） ・カミサマオガミムチ（団子）をニギャデヘェ（苦竹）の葉に載せる
[18]	大島（笠利）	正月、5月、9月[2]	家内安全	・榊 ・御神酒 ・シュウギ ・大小の団子
[16]	大島（大熊）	正月、5月、9月[2]	出郷者の安全祈願	・径5cmくらいの親ムチ（丸平の団子）を3個を、33個もしくは60～70個のウムルムン（小さい団子）の上に載せる ・ウシンメ（米を水に浸したもの）と榊の枝葉、盛塩を盃に盛る
[25]	大島（瀬戸内）	正月、5月、9月[2]	出郷者の安全祈願 海上安全	・糯米を搗いて丸め蒸した大小の餅 ・榊
[19]	徳之島（亀津）	正月、5月、9月	家内安全	・東向きに向いたヤブニッケイの小枝 ・御神酒 ・神水 ・神米 ・大小の団子（白米を水に浸し、臼に搗いて、水を加えて柔らかくし、小さく握って熱湯に入れて煮たもの）を、月と太陽に模した大きなもの2つと、星に模した小さい団子をたくさんつくる。
[15]	徳之島（兼久）	正月と10月[3]	無病息災	米を粉にした丸い団子と御神酒
[30]	徳之島	正月、5月、9月[4]	家内安全	・月と太陽に模した大団子2つ、星に模した小団子を重箱一杯作る
[23]	喜界島（荒木）	正月、5月、9月[5]	身体の弱い者がいる、原因不明の病人が出る、不幸が続く家で行なわれる	・口に末広形に折った飾りを挿した御神酒瓶2本（焼酎） ・グンシメー（御餞米） ・ウムルムン（米の粉を小さく丸めたものを水煮にした団子） ・水の初（鉢に満杯に水を注ぎ、三つ葉付きの竹の葉を浮かべる） ・5銭～10銭程度のウサンシン（賽銭）（参列者）
[31]	喜界島	正月、5月、9月[5]	身体の弱い者がいる、原因不明の病人が出る、不幸が続く家で行なわれる	・口に末広形に折った飾りを挿した御神酒瓶2本（焼酎） ・刻んだ昆布 ・生米 ・塩 ・小さく丸めた団子 ・20銭（参列者）
[14]	沖永良部島	正月、5月、9月	・海上安全 ・家内安全 ・豊漁祈願	・水で煮たり蒸したりして柔らかく作った団子で、星に模した小さい団子を山高く盛ったものに、月に模した大きい団子を3つずつ載せたものを2組用意する。あるいは、小さい団子を34個、大きい団子を2個つくる家もある。 ・洗い米 ・御神酒 ・塩 ・（御飯や吸物を3組並べる家もある）
[12]	沖永良部島	正月、5月、9月	海上安全	・径2cmのたくさんの小さな団子（星を意味する？）の上に、月を模った扁平な径6cmぐらいの団子を載せる ・御神酒
[13]	沖永良部島（内城）	正月、5月、9月	無病息災	団子とヤーで汲んだ水（御神酒と天婦羅を供える家もある）

1）13日が丑年・寅年、15日が戌年・亥年、17日が子年、23日が午年、24日が辰年・巳年、25日が卯年、28日が未年・申年・酉年生まれの人のために拝むが、二十三夜を除いて正月、5月、9月のみ

2）13日が丑年・寅年、15日が戌年・亥年、17日が子年、23日が午年、24日が辰年・巳年、25日が卯年、28日が未年・申年・酉年生まれの人のために拝む

3）13日の晩から28日の晩までであり、日柄の決定はノロやユタが決定し、その日を自分の一生の拝み日とした

4）祭日は9日、13日、15日、21日、23日、28日

5）この3か月を「ショーグック」と呼ぶ

団子状にしたものを多く供える点が挙げられる。第一の点について、月神は不浄を特に嫌うとされている[23]。そのため奄美大島大熊では、親族が死亡した場合は 2 年、出産は 1 年、葬儀への参列や出産の家に見舞いに行った場合は 1 回の参列の延期が必要となる[16]。

第二の点については、線香が火時計としての役割を果たしていた。雨曇で月出が目視できない場合には、焚いた線香の数を数えて解散時間を決めたという[24]。二十三夜なら 23 本の線香というように、その晩の数だけ線香を焚く地域や[20]、線香 1 本を 1 時間と見立てて月待する地域もある[25]。

第三については、表 1 に示す通り、多くの地域で供物は団子であり、奄美大島大熊では 70 個程度[16]、屋久島油久では 365 個の団子が供えられる[17]。また団子は星を模したものとの記述が散見され、同時に月に模した大きめの団子を作る地域が見られることから[14]、夜空に浮かぶ月の様子を、供物を通して表現しているのでないかと思われる。これらの団子は、祭礼終了後に、参列者や島外に住まう親族、近隣住民らに配られる[11]。

三夜待の祭礼目的を見ると、家内安全や離島した出郷者の安全を願う地域が多い傾向にある（表 1）。柳田[4]は、三夜待を作の神や山の神との交流としたが、むしろ南西諸島では、海の神や航海安全の神を祀る祭礼として把捉される向きがある。沖永良部島では「二十三夜様は軽石」なる俚諺があり、その供物である御神米を携帯すると海で遭難しないといわれている[12]。かかる意味が転訛して、旅人

の平穏、つまり出郷者の安全を祈願する祭礼になったことが推察される。

また南西諸島には、現世利益としての神、特に霊験あらたかな三夜様として描写された民話が多く残る[32]。屋久島[33]、悪石島[27]、徳之島[30]等では、三夜様を航海安全、海上安全の神と結びつけた民話も存する。三夜待の間中、かかる民話が語られることを通して、祭礼の意義を確認していったのであろう。

4. 奄美与論島における三夜待

4.1　与論島における三夜待の概況と供物

鹿児島県与論島は、人口約 5,000 人で構成される鹿児島県最南端の離島である。島南部からは沖縄本島が眺望でき、かつては国頭村との交易が活発になされていた。沖縄返還まで日本最南端であった与論島は、1960 年代から 70 年代にかけて、いわゆる「マスツーリズム」を経験する[34]。観光による経済効果は大きかった反面、諸種の社会的インパクトも残した。かかる反省にもとづき、現在は、星空を地域資源とした持続可能な観光地域づくり（アストロツーリズム）に着手している[35]。

また与論島には、「ブリブシ」や「フガニミチブシ」等の星名方言をはじめ、豊かな星文化が伝承されており、島民の生活と天文が密接な関係にあったことが報告されている[36]。ただし三夜待に関しては、南西諸島の他地域に比して記録が少なく、文献でも「月神信仰の一種で、主として城・朝戸地区で行われていた[37]」なる記述に留まっている。

灰色文献ではあるが、与論島の三夜待を扱ったものに、梶本・日野[38]と前城[39]がある。特に前城[39]による論考は、本行事を仔細に記録しており、大変に示唆に富むものである。本稿以下の記述の多くも、氏の論考に依っている点はご承知おき願いたい。

本稿では、与論町城地区 A 家における三夜待を取り上げる。筆頭著者は、2023 年 2 月 12 日（旧暦 1 月 23 日）に行われた三夜待に参列する機会を頂いた。祭主が「見せものではないから」と語るように、普段は近親者のみで行う祭礼である。かかる行事特性に鑑み、以下では仮名で記述していくこととする。

A 家の三夜待は現在、B 家の b（1948 年生）が祭主を務めている。本来は A 家の長男 a が祭主を務めるべきだが、現在は出郷者であるため、a の実妹で、B 家に嫁いだ b が代理で祭主を務めている。彼女は、2008 年に A 家当主（a・b の実父で 1916 年生）が祭礼を行えなくなって以来、彼が行ってきた内容を思い出しながら祭祀を執り行い続けてきた。

また当日は、C 家の c（1952 年生）も参列した。c は、b の母方 C 家の養子に入った A 家の次男（つまり b の実兄）の嫁である。c は、一度は関西に出たが、家長の定年退職を機に帰島し、2001 年から参列を続けている。したがって当日は、B 家の b（祭主代理）と、C 家の c、及び筆頭著者の 3 人で祭礼を行った。

なお、2021 年 1 月までは D 家の d も参列していたが、高齢のため、現在は参列を辞退している。沖縄交易を生業としていた D 家は、元々 A 家との縁戚関係ではなかったが、航海安全を祈願するために三夜待に参列してきたという。現在は縁戚関係を結んでおり、b の父方祖母が D 家出身であり、c の生家は D 家である。また、これまでは b の夫も参列していたが、今回は欠席となった。

b が物心ついた頃には、A 家、C 家、D 家と関係者数名で祭礼を行っていたが、その前はより多くの参列があり、b の大叔父に当たる人物（大正生）の手紙には、三夜待の想い出が記されていたという。しかし現在は、実質的に B 家と C 家だけで行なわれている。

A 家の三夜待は、旧暦正月、5 月、9 月の年 3 回行われている。柳田[4]は、かかる 3 回の内、特に正月に重きが置かれることを指摘するが、b によるとどの月も同じだという。

A 家の三夜待にもキエージキ（禁忌月）がある。祭礼月に葬儀に参列した、または出産に立ち合った場合は、祭礼への参加を見送らなければならない。c は基本的にキエージキの 23 日までは葬儀に参列しないが、外せない場合のことも考えて、祭礼の 1 週間前までに供物（二合瓶の御神酒 2 本と 3 合から 5 合の米）を A 家に届けている。また A 家で不幸があった場合は、他家からの参列を断り、A 家のみで三夜待を行う。換言すると、たとえ身内に不幸があっても、A 家では必ず三夜待を執り行わなければならないのである。

また b 曰く、A 家の先祖は京から左遷された人物で、与論島で妻子を持ったが、終には妻子を残して京に帰ったという。彼の生年は不明だが、祭礼で大床の前に掛ける幕（図 1）に「天保十二年辛丑改之」とあることから、少なくとも江戸時代後期には、この祭礼が執り行われていたことが推察される。南西諸島の三夜待において、こうした幕を張る記述は管見しないため、A 家独自の祭礼方法であるものと思われる。

A 家の大床は屋敷の東側にあり、北側に神棚、南側が大床である。大床には、三夜待でのみ使用する掛け軸が掛けられる。現在の掛け軸は、1943 年（昭和癸未）に補修されたもので、明末期に成立した『三寶大監西洋記』に引用された一説が書かれている。

図 1 大床の前に張る幕（撮影：筆頭著者）

大床の正面に盆が置かれ、その上に、奥から花瓶に生けたススキ、ウミキ（御神酒）が入ったカンビン（神瓶）2 対、碗に入ったアレグシメ（洗御米）2 対とその間に盃、茶湯 2 対とその間にミジヌパチ（神様に供える水）、その両側に参列者が持参したウミキが供えられる。また盆の両側には三段重ねのムッチャー（餅）が 3 列ずつ供えられ、盆の手前で線香が焚かれる（図 2）。そして 1 段下がったところに、参列者が持参した米が供えられる。

かかる供物の飾り方にも決まりがある。まず生けるススキは、メーグチパンタから採取したものでなければならず、数は 9 本である。アレグシメは 9 回洗ったものを供える。ミジヌパチに入れる御水は、バケツに汲んだものから柄杓 9 杯分で碗を並々にする。ウミキについても、奥から、カンビンに入った A 家のウミキ、C 家持参のウミキ、B 家持参のウミキの順で、また D 家が参列していた頃は、A 家、D 家、C 家、B 家の順にウミキが供えら

図 2 三夜待における大床（撮影：筆頭著者）

れていた。これらは当日の朝に準備される。

A 家の供物で最も特徴的なのは、ムッチャーである。A 家では、大中小の扁平状のムッチャーを計 6 組、三段重ねで供える（計 18 個)。ムッチャーは当日の朝から作りはじめる。約 2 kg のモチ粉に砂糖や片栗粉を入れて練り、扁平状に成形する。大は 280 g（径 8cm、高さ 3cm)、中は 150 g、小は 80 g で、成形した後に蒸し器で蒸す。b の幼少期には、糯米を蒸したものを父親が臼で搗いていたという。ムッチャー作りは大変むつかしいため、b が拝礼できない時に来島する a の妻は、このムッチャーを外注して供えている。

ムッチャーは、三夜様の加護を受けた貴重なものであるため、参列者はお守りとして重宝した。c は薄く切ったムッチャーを車に供えており、また b の母も旅出の際はこれを必ず携帯したという。またムッチャーは、祭礼翌日に、本土に住まう A 家親族や近隣住民に配っている。島内ではかつて 4 家に配っていたほか、これを希望する家が多かったが、現在では 2 家のみに配っている。その内の 1 家である E 家（b の母方の親戚筋に当たる）では、「ハミラチタバーリ、トートゥガナシ」と言ってから恭しくこれを受け取り、必ず神棚で受け取ったことを報告してから、丁寧に切り分けて家族全員で頂くのだという。

しかし A 家のムッチャーは、南西諸島の他地域に比して、その数が明らかに少ない。他地域では団子状にしたものをたくさん作って在郷者の親族や近隣住民に配っている（表 1)。しかし A 家のムッチャーは計 18 個であり、その内、参列者が 1 組（3 個）ずつ持ち帰るため、手許には数個しか残らない。かかる点に見て、A 家の三夜待が極めて個人的な祭礼行事であったことが推察される。

また供物の祀り方には、「9」にまつわるものが多い。b は「苦難」を除去する暗示でないかというが、これも他の南西諸島地域には見られない特徴である。

4.2　与論島 A 家における三夜待の流れ

では、具体的な祭礼の流れを見ていこう。

19 時 30 分、筆頭著者が A 家を訪ねると、すでに b と c が談笑していた。b より、大床に供えたものと同じ茶が振舞われる。

19 時 40 分、b が幕の内に入って線香をあげ始める。ここでは A 家の親族 14 カブの線香がそれぞれ 3 本ずつ、b によってあげられる（計 42 本)。各家の線香をあげる際は「ヤーヌシ、エーグンドー」のように、屋号ないし名前を 1 カブずつ言いながら線香立てにあげていく。全家の線香を立てた後、b は各家から持参されたウミキを盃に注いでいく。これは A 家、C 家、B 家の順に注がれる。また向かって右側のウミキ、そして左側のウミキの順に注ぐ。したがって、6 杯のウミキで盃を並々にしなければならない。ここでも同様に、各屋号を言いながら盃にウミキを注ぐ。

19 時 52 分、c も幕の内に入って拝礼が始まる。座して合掌、b が「チットートゥ」と言って、二度座礼し、以下の祝詞をあげる。なお以下下線の文言は 3 回繰り返される[40]。

ドウカ、チットートゥガナシ（誠にありがとうございます）。シューヤ（今日は）、令和 5 年ヌ 1 月ヌニジューサンヤナヤビティ（の二十三夜でございます）。コンチキヌ（今月の）、イリヌピーカラウガミビキ（日没から拝んでおりますのは）、ウマヌヤーヌ（本家である）（A 家の屋号)、(C 家の屋号)、（B 家の屋号）、ムールスルウティ（皆で打ち揃って）、チュラアラタマイシチュティ（心身を美しく清め改めて）、ウガミャービューシ（拝み申し上げております）。またヤマトゥナイエール（本土におります）、A 家シンゾクヌ（親族は）、ナーヤーヤーヌ（各家庭で）、オセンコーインチャ（お線香を）、カゲゼンデエーシチ（あげて）、ウガミャービューシ（陰膳をして拝み申し上げておりますので）、ウヌダンゾウディティバーリ（よろしくお願いいたします）。チュラウキツゥイシチタバーリ（どうか綺麗な心でお受け取りくださいませ）。またシューヌ（今日）、オガミュールノリトインチャ（拝みはじめの祝詞を）、サーリラチタバーリ（申し上げます）。チットートゥガナシ（誠にありがとうございます）。「富貴長命、子孫繁栄、無病息災、火難水難の除去アラチタバーリ（もたらし給え）」ドウカまた、

タッチャイビッチャイシチ拝礼をしますので、よろしくお願いします。

【立って合掌、その後に座礼する拝礼を9回】

チットートゥガナシ。ニャマカラ、オツキサマヌ、アガユーシンチャマチシ、ウガミャービューシ、マチウケラチ、チュラオガンシラリティダバーリ。チットートゥガナシ。シューヤ、メーカラサーリトゥンガネッシ、和歌山大学ヌ大学院生ヌ、澤田さんチエルヒチゥヌウガマチシタバーリチュルクトゥシ。トートゥガナシ。上手くいきますように、みんなで拝礼したいと思います。ドウカ、トートゥガナシ。

祝詞をあげた後、b と c は再び座礼を二度行う。b の父は、献上する祝詞を毎回少しずつ読み替えていたが、b は自らで紙に書いたものを読み上げる形を取っている。この祝詞は、b が父のそれを思い出しながら書いたものである。座礼をした後、b と c は幕を出て、隣の神棚でも拝礼をする。

A 家の三夜待では、拍手を打ってはならない。沖永良部島では二礼二拍の拝礼がなされるが[14]、A 家の三夜待は合掌が基本である。また立って合掌、その後に座礼を計 9 回、約 1 分にわたって行われる拝礼方法も他の南西諸島地域では見られない独特なものである。

拝礼の後は、食事をしながらの座談となる。仕出し弁当、刺身、漬物、味噌汁、お菓子、蜜柑、ノンアルコールビールやお茶などが振舞われる。以前は b の母が食事を作っており、塩揉みした赤魚の煮つけや焼き物、炊いた大根、揚げ豆腐、ウブシ（蒸し菓子）を饗応していた。また参列者も一重一瓶を持参した。しかし 2005 年頃に、a の妻が会費制による仕出し弁当の一括購入を提案し、現在ではそれが実行されている。

普段は世間話をしながら月を待ち、時には居眠りしてしまうそうだが、今回は A 家の三夜待に関する話しをしてもらった。

線香を絶やしてはいけないため、時折 b は幕の内に入って、線香の長さを確認する。2 回目からは長い線香が使用され、供える線香も各家の分でなく 3 本のみがあげられる。また線香を代える度に、ウミキも注ぎ直す。すでに入っている盃のウミキは、専用の漏斗を使用して、手前に置かれた 1 升瓶に返す。そして前と同じ要領で、盃を並々にする。20 時 23 分、21 時 39 分、23 時 2 分、翌 0 時 42 分に、それぞれ線香とウミキが代えられた。

この日の月出は翌 1 時 7 分であった。普段は新聞に掲載された時刻から月出を換算するというが、今回は筆頭著者が国立天文台の Web ページで確認した。月出直前の 0 時 58 分、b は幕の内に入って、祭礼冒頭と同じ要領で各家の線香をあげていく。ここでは短い線香が使用される。また同じくウミキも代えていく。この間に c は、月出がないかを確認しに行く。月見台はなく、海岸線まで見通しの利く道路まで出て、月出を確認する。b によると、月出を確認する担当はいなかったが、b の父が月出を確認しに行く時には「ニャマ、ウガマラジドゥ」などの表現を用いていたという。残念ながら、当日は曇天で、月出を確認することはできなかった。

1 時 8 分、月出は確認できないと判断し、祭礼終了の拝礼を行う。なお晴天時は、必ず月出を確認した後に以下の祝詞をあげなければならない。b と c は、「ドウカ、トートゥガナシ」と言いながら 2 度の座礼を行い、以下の祝詞をあげた。

ドウカ、チットートゥガナシ。ニャマンターナー、チッキューヌアガユーシ、マチカニティイ、チュラオガンシャービタン。またキュールキエヌ、5 月ヌ、ニジューサンヤマチカニティシチ、チュラオガンシラリュンガネッシ、ニチジョーヌクラシンチャ、チュラアラタマイシチュティ、クラシャービューシ。またオガミビキ（A 家の屋号）、（C 家の屋号）、（B

家の屋号)ヌ、ムールヌ、シマタビヌ、キネーインターナー、シッカイミーマブティ、ムジコシ、ナーヤーヤーヌ、キネームールガドゥクゥサシ、チュラキバイシミティ、ヌーヌシショーインネンガネッシ、セーカツアンテーヌクラシンチャ、ミーマブイシチタバーリチヌ、ニゲーエービューシ。シューヌ、オワリヌ、ノリトインチャー、サーリラチタバーリ。チットートゥガナシ。「富貴長命、子孫繁栄、無病息災、火難水難の除去アラチタバーリ」またアトゥ、タッチャイビッチャイシチュティ、ハガミャービュークトゥ、ドウカよろしくお願いします。

【立って合掌、その後に座礼する拝礼を9回】

フリシ、シューヌ、ニジューサンヤヌ、神拝みを終了します。シューヤまた、さっき話した通り、澤田さんが見えて、一緒に話をしたり座談して、とても有意義な二十三夜祭りができました。本当にありがとうございます。ミシークトートゥガナシ。

祝詞をあげた後、b と c は、「ドウカ、トートゥー。チュラウガンシャービタン」と言いながら、再び座礼を二度行う。終わりの祝詞にある通り、A 家の三夜待では、家内安全や出郷者平穏の側面が前景化している。

拝礼の後、b は漏斗で盃に入ったウミキを一升瓶に返す。そして、B 家と C 家が持参した二合瓶を 1 本ずつ手に取り、一升瓶に溜めておいたウミキをそこへ順々に注いでいく。

次に、供物のムッチャーを三夜待でのみ使用するまな板と包丁を使って切り分ける。まず参列者に饗応する分として、小のムッチャーを二等分、中のムッチャーの端を 1 つ切って、3 人分用意する。半月上に切られたムッチャーはウサンデー（供物を下げたもの）と呼ばれる。このウサンデーの上に、供物のアラグシメを振りかける。その後、今度は小のムッチャーに 1 か所、中と大には 3 か所、平行に切れ目だけを入れていき、再び 3 つを三重にした後、上からアラグシメを振りかける。そして、その重になった 3 つ 1 組のムッチャーと先の二合瓶 1 本が、c に手渡される。筆頭著者も、アラグシメが振りかけられた大のムッチャーを 1 つ頂いた。

供物の分配が終わると、各家のウミキが混ざった二合瓶の焼酎を盃に注いでいく。かつては大杯についで、回し飲みの要領で順々に頂いたという。焼酎が回される際は、b から本日の感謝が述べられる。全員が一通りウミキを頂くと、先のウサンデーと吸物が饗応される。吸物の具材は椎茸、ウズラの卵、えび、豆腐、小松菜で、祭礼に切れ目がないよう、具材の数は必ず奇数にして入れる。

ウサンデーと吸物を頂くと解散である。A 家を出たのは 1 時 50 分であった。なお b は、その日の内に供物や幕を片付けなければならない。片づけをしないと、三夜様に無礼に当たるという。また翌日は、大床に飾ったススキを所定の位置に供えておく必要がある。

5. 結びにかえて

本稿では南西諸島の三夜待を概観した上で、与論島 A 家の三夜待を仔細に記述してきた。A 家の三夜待は、他の南西諸島地域にない特異な祭礼方法が看取され、具体的には大床の前の幕、ムッチャーの数、礼拝方法が挙げられる。また A 家の祭礼は、集団講ではなく、個人儀式としての側面が強い。あくまで私見だが、A 家の先祖が京に由来すると b が語るように、A 家の祭礼構造は近世以前に宮廷で行われていた儀礼を基礎にしつつ、近隣地域の影響をあまり受けずに継承されてきたものでないかと思われる。今後は、本土における祭礼構造との接続性から、A 家の三夜待を検討する必要がある。また琉球文化との関連から、南西諸島の三夜待を検討していくことも今後の課題である。琉球では 17 世紀の資料に三夜待の描写が見えるとあるが[41]、今後

はその詳細に関する文献整理が求められる。

結びにかえて、A 家における三夜待の現状について一言しておきたい。先述の通り、A 家における現在の三夜待は、b が a の代理として祭礼を執行している。また与論町民でも、A 家が三夜待を行っていることを知る人はほとんどおらず、近隣住民でさえ詳細を知る人は少ない。

かかる状況の中にあって、b は次のように語る。

> 親が今まで苦労してやってきたことを、今頃はそんなことをする人はあんまりいないから、自分の時代になったらできないからって、軽くそんなふうに思われたらね。親は継いでくれると死んでも信じてるからね。父の代で終わりにしたら、申し訳ないと思うわ。絶やさないで欲しいと、私は思ってますよ。

A 家の三夜待は、継承の危機がこれまでにも何度かあったというが、親族で助け合いながら、今まで引き継がれている。しかし現状では、b を最後として祭礼が断絶してしまう可能性が十分に考えられる。

これは A 家の個人的問題であり、著者らが介入すべき事項ではない。しかし今回、本行事の参加に際して、祭礼の様子をビデオカメラで撮影する許可を頂いた。活字では伝わらない祭礼の雰囲気も、映像では幾分か感じ取られるものがある。今後は、かかる映像コンテンツのアーカイブ方法を検討するとともに、個人が執り行う祭礼を教育現場やアストロツーリズムの文脈でいかに紹介していくかを勘案する必要があるものと思料する。消えゆく伝統文化や天文民俗を、後世に継承する手法を検討することは、極めて喫緊の重大な検討事項である。

謝　辞

筆頭著者は大変なコミュ障ですが、お二人としたムヌガッタイはとても有意義であり、また二十三夜様の拝礼という貴重な機会を頂きました。大変不躾なお願いにも拘わらず、筆頭著者の参列をご快諾頂いた関係者の皆様に、記して深く感謝申し上げます。なお本稿は、科研費（課題番号 : 22K12613）の援助を受けて執筆したものである。

文　献

[1] 飯田道夫（1991）『日待・月待・庚申待』, 人文書院.

[2] 柳田國男（1949=1969）「猿の祭」『柳田國男全集 20』, 筑摩書房, pp.224-231.

[3] 桜井徳太郎（1962）『講集団成立過程の研究』吉川弘文館.

[4] 柳田國男（1950=1999）「二十三夜塔」『柳田國男全集 18』, 筑摩書房, pp. 236-264.

[5] 大島建彦（1956）「庚申と二十三夜」, 日本民俗学, **3**(3) : pp.51-60.

[6] 小花波平六（1988）「守庚申より庚申待へ」『庚申信仰』, 雄山閣出版, pp.175-201.

[7] 窪徳忠（1968=1980）「庚申講と月待」『庚申信仰の研究』, 原書房, pp.492-517.

[8] 小野重朗（1981）『民俗神の系譜』, 法政大学出版局.

[9] 崎原恒新・山下欣一（1975）『沖縄・奄美の歳時習俗』, 明玄書房.

[10] 登山修（1983）『瀬戸内町の昔話』, 同朋舎.

[11] 田畑千秋（2005）『奄美大島の口承説話』, 第一書房.

[12] 甲東哲・先田光演（2011）『分類沖永良部島民俗語彙集』, 南方新社.

[13] 東北学院大学文学部歴史学科民俗学研究室（2021）『沖永良部・内城の民俗』, 東北学院大学学術研究会.

[14] 南山大学文化人類学研究会村落調査サークル（1990）『沖永良部島の祖先信仰と社会』, 南山大学文化人類学研究会.

[15] 土岐善作（1976）「我が村の風俗習慣（徳之島天城町兼久）」『奄美の文化』, 法政大

学出版局, pp.323-333.
[16] 亀井勝信（1976）「大熊部落に於ける民間信仰の風習と宗教」『奄美の文化』, 法政大学出版局, pp.126-162.
[17] 下野敏見（1963=1981）「種子島・屋久島の二三夜待」『南西諸島の民俗Ⅱ』, 法政大学出版局, pp.397-401.
[18] 中場徳善（1973）「笠利町の年中行事、遺跡・史跡および宗教」『笠利町誌』, 笠利町, pp.390-420
[19] 小林正秀（1962=2021）「徳之島の年中行事・亀津の年中行事」『徳之島町「民俗文献」選集』, 徳之島町誌編纂室, pp.127-154
[20] 恵原義盛（1973）『奄美生活誌』, 木耳社.
[21] 宮本常一（1974）『屋久島民俗誌』, 未來社.
[22] 嶺武雄（1927=2020）「鹿児島県大島郡東天城村調査」『徳之島町域「農村調査」報告』, 徳之島調査委編纂室, pp.11-110
[23] 岩倉市郎（1943）『喜界島年中行事』, 日本常民文化研究所.
[24] 栄友直（1917）『徳之島小史』, 私家本.
[25] 瀬戸内町誌編集委員会編『瀬戸内町誌（民俗篇）』, 瀬戸内町.
[26] 名越護（2020）『鹿児島野の民俗誌』, 南方新社.
[27] 下野敏見（1994）『トカラ列島民俗誌』, 第一書房.
[28] 昇曙夢（1949）『大奄美史』, 奄美社.
[29] 田畑千秋（1992）『奄美の暮しと儀礼』第一書房.
[30] 福田晃（1984）『徳之島の昔話』, 同朋舎.
[31] 拵嘉一郎（1990）『喜界島風土記』, 平凡社.
[32] 柳田國男編（1974）『鹿児島県喜界島昔話集』, 三省堂.
[33] 下野敏見編（1977）『日本の民話 25 屋久島篇』, 未來社.
[34] 麓才良（1988）「観光」『与論町誌』, 与論町教育委員会, pp.695-732.
[35] Sawada, K et al. (2023) ‘Astrotourism and Sustainable Development’, *Wakayama Tourism Review*, **4**：pp.21-24.
[36] 澤田幸輝ら（2021）「与論島における星文化とその観光活用に向けての一考察」, 観光学, 25：pp.69-82. なお月のことを、与論方言では「チッキュー」と呼ぶ。
[37] 菊千代（1985）『与論方言集』, 与論民俗村; 野口才蔵（1988）「年中行事」『与論町誌』, 与論町教育委員会, pp.1077-1088.
[38] 梶本久子・日野多賀子（1984）『離島の食生活』太陽社.
[39] 前城菜美子（2019）『与論島城の儀礼における飲食場面の変化に関する研究』, 琉球大学大学院人文社会科学研究科修士論文.
[40] ユンヌフトゥバ（与論方言）から標準語へは、b からの助言と菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』, 武蔵野書院. を参照した。なお表現誤りの一切の責任は筆頭著者にある。
[41] 平敷令治（1990）『沖縄の祭祀と信仰』, 第一書房.

澤田 幸輝

尾久土 正己